

私を通った幼稚園・保育園(8)

「いま」につながる私の「幼稚園」

佐伯 一弥

「私を通った幼稚園・保育園」というシリーズ名にもかかわらず、まずはじめにふれておかなければならないことがあります。それは、私の場合、制度上の厳密な規定において、幼稚園にも保育園にも通っていないなかった、ということですが、しかし、それに「類する」施設には通っており、実は、そこでの様々なかかわりが今の仕事につながっています。そこで、今回は半ば番外編的に、この施設のことについて紹介してみたいと思います。

私の生まれ育った「街」と通っていた「幼稚園」

私が生まれ育ったのは東京の郊外でした。もともとは武蔵野の雑木林が広がる中、古い街道沿いに家と畑が転々と並んでいるようなところだったそうです。しかし、昭和三〇年代に入

り、私の父が勤務していたメーカーが大規模な工場とそれに伴う社宅など関連施設の開発に着手しました。

私は生まれてから二〇代半ばまで、この社宅で暮らしていましたが、いま振り返るととてもユニークな環境に身を置いていたのだと感じます。先ほど述べたように、私が生まれ育った社宅は、それまで雑木林と畑しかなかったこの地域に、工場の開設と共に開発されたいわば大規模な団地だったからです。一棟あたり三〇から五〇世帯入居できる建物が、全部で二〇棟以上あり、そこで居住する人たちの生活を支えるために、敷地内にはスーパーマーケットや様々な商店の他、飲食店、プールや野球場、グラウンド、テニスコート、体育館などのスポーツ施設、児童遊園（その当時は二箇所ありました）、そして病院（診療所）までありました。さらに、同敷地内を割譲する形で、公立の小学校が設置されました。つまり、工場に隣接するこの社宅群が一つの“街”として構成されていたのです。

そして、この“街”の中に私たちが“幼稚園”と称していた二年保育の企業内保育施設がありました。もともと、私自身は第二次ベビーブームの世代に該当し、企業内保育施設とはいえ、私が通っていたときには年少が五クラス・年長が四クラスの計九クラスがありました。そして、そのほとんどの子は、隣接する公立小学校へ入学しました。当時は全体で一〇〇〇人規模の小学校だったのですが、そのうちの約半数がこの“幼稚園”からの出身者でした。つまり、制度的には無認可の保育施設に該当するのですが、実質的にはこのような性格の“幼稚園”に通っていたのです。

“園生活”を振り返る

改めて当時の園生活のことを振り返ると、断片的ではあれ、様々な場面が思い起こされます。行事としては、運動会や生活発表会、お泊まり保育などの光景がいくつか思い出されますし、また、普段の生活の場面についても、園舎内はもとより園庭の光景と合わせて、いくつか思い出されます。どちらかというと活発に体を動かす遊びよりも、自分のイメージ世界——特に鉄道など乗り物のイメージ——に浸りながら、ひとりで遊ぶことが好きだった私にとって、園庭の片隅に置かれていた廃車となったマイクロバスによく乗り込んだことや、園舎内のすべての廊下に貼られたビニールテープの線路の上を、底を空けてもらった段ボール箱に入り、両脇で抱えつつ「ガタンゴトン……ガタンゴトン……次は〇〇駅……」とつぶやきながら電車になりきっていたことは本当に楽しい記憶です。そのことは、同時に、園児数が多かった当時の状況の中でも、子どもたちの思いから繰り広げられる遊びを大切にしたい園生活を送らせてもらっていたのだろうと考えられます。

私の住んでいた“街”のすぐ近くには、様々な教材を用いた“知的教育”と称する学習活動を積極的に展開し、それを謳っていた（こちらは制度上も“本物”の）「幼稚園」がありました。社宅からも通っている子どももいて、いろいろな教材などを見せてもらったことがあるのですが、そのときには「ずいぶん自分の通う“幼稚園”と違うところがあるんだな……」と幼心にも感じたものでした。併せて、素材に「なんだか難しそうで、大変そうだな……」と思っ

たのも正直なところですよ。くわえて、小学校には両方の幼稚園を卒園した子どもたちが集まってくるわけですが、そこに成績上の大きな差が生じることはなく、これもあくまで個人的な実感ではありますが、「自分の通った『幼稚園』は遊んでばかりいたけれど、別にあれよよかったんだな……」と、小学生なりに捉えていました。

だから、というわけではないでしょうが、卒園後もこの『幼稚園』にはよく遊びに行っていました。当時、この『街』に住んでいた約五〇〇名の小学生からなる子ども会の活動の場になっていたので。そこでは様々なサークル活動が企画され、学校から帰るとすぐに『幼稚園』へ遊びに行きました。その際、自分のお世話になった先生方と会えるのも、また大きな楽しみでした。

もともと中学校に進学してからは、校内のクラブ活動などで忙しくなり、『幼稚園』の脇を歩いて通学していたものの、その中に足を運ぶことはすっかりなくなっていました。

再び、『幼稚園』に行く

その後、私は大学に進学しました。そして、二年次に開設されていた「発達心理学」を受講したのですが、ここである宿題が出されました。それは「夏休み期間を利用し、何でもいいから年齢差について検討する研究（実験）をしてきなさい」というものでした。その時点で実験法をはじめとする研究法のトレーニングも受けていな



かった私たちには戸惑うばかりの課題でしたが、逆に、「生身の子どもたちと出会い、そこで様々なことを考えなさい」というメッセージが込められているのだろうと（勝手に）捉え返し、具体的な課題を考えました。そのなかで、バツと目にとまったものがありました。それは「幼児の和音に対する評定」に関する研究で、「これなら何人かの子どもに和音を聞かせて、その印象を聞けばいいだろう」という安直な（もつといえば杜撰な）研究デザインを企画しました。そして、そのフィールドとして、自分が通っていたあの「幼稚園」に協力をお願いしようと思ったのです。

小学校を卒業してから約一〇年近く縁がなかったので、協力依頼のためにかけた電話機の前ではとても緊張しましたが、自分も園児の時にお世話になった園長先生の声を聞いた瞬間、ホッと安らいだ感じがありました。そして、後日改めて「幼稚園」に足を運び、具体的な手続きと日程に関する打ち合わせをしました。

そのとき、卒園後に改築された園舎の雰囲気はもとより、自分が通っていたときと比べて（三年保育になったにもかかわらず）園児数が半数以下になっていた「幼稚園」の様子を見て「ずいぶん、変わってしまったな……」と感じました。しかし、その一方で屈託のない笑顔で遊ぶ子どもたちの様子を見ると、自分たちの頃と変わらないものもあるな……と感じました。

そして、このことがきっかけで、この研究テーマを修正しながら三年次のゼミ論文・四年次の卒業論文を作成し、それと併せて、頻繁にこの「幼稚園」へ足を運ぶようになりました。あの機器を用いて子どもに和音を聞かせ、その評定を聞く……という研究の手続きそのものは短

時間で済むはずなのですが、私はお弁当を持参し、子どもたちとたくさんかわらせてもらいました。この時点での私は保育学を専攻しているわけではなく、保育者養成の専門課程も何ら受けていなかったのです。いま振り返るとただ一人の「お兄ちゃん」として「遊ばせてもらっていた」のが実際のところですよ。けれども、そのことをきっかけとしてこの頃から、保育に対する関心が強くなつていき、大学四年生の頃には本格的に保育の勉強をしたいと志すようになりました。そして、保育系の大学院へ進学し、専門的な勉強を積み重ねながら、修士論文の作成にあたったのですが、ここでもこの「幼稚園」で行われている就園前の子どもとその保護者を対象とする子育て支援活動にボランティアとして参加し、そこでの経験をまとめていきました。このように、この「幼稚園」は幼少期の私を育ててくれただけでなく、「いま」の私に直接的に結びくるのです。そこでは、幼少期に送らせてもらった生活と同じように、様々な体験のもとづく思いや気づきが後の「学び」へとつながる形で、「私」を支えて続けてくれたのです。残念ながら「幼稚園」の方は、運営する企業の事情などから、数年前に閉園となりました。多くの職員、卒園児が集まった閉園行事では、複雑な思いに駆られました。この「幼稚園」に対する感謝の気持ちは変わりません。また、自分の仕事もすっかり忙しくなり、また、私自身も社宅を出ていまの居住地へと移ったことから、現在も続いている前記の子育て支援を含めて、物理的にはだいぶ縁遠い関係にはなりましたが、この「幼稚園」とそこでの様々な思い出は、「いま」の私を支えてくれるものとしてしっかりと生きています。

(東京家政大学)